

先月の下旬の雪が連日の真冬日で氷に変化しつつあったが、久々の降雪があり、冬を実感するこの頃だ。帯広測候所のデータによると、十勝の最低気温は明治 35 年 1 月 2 日のマイナス 38.2℃ (国内第 2 位)、最高気温は、大正 13 年 7 月 12 日の 37.8℃ (道内最高) であり、実に 76 度の較差がある。因みに日最大降雪量は、昭和 45 年 3 月 16 日に記録した 102cm であり、その翌日には最深積雪を記録している。



(参考にした昭和 12 年編纂の北海道史)

さて、「蝦夷 3 官寺」なるものを御承知だろうか。厚岸は、古くから天然の良港として栄えてきた。厚岸に朔東随一の古刹、国指定 (昭和 48 年 10.29) 史跡「国泰寺 (鎌倉五山派 景運山国泰寺、臨濟宗)」がある。国泰寺は、有珠の善光寺 (伝説によると奈良時代の建立で、1804 年に指定された。)、様似の等澎院 (とうじゅいん) と共に「蝦夷 3 官寺」と呼ばれている。

蝦夷 3 官寺が建立された背景を管見すると北辺防衛の変遷や痛ましい歴史に遭遇する。

18 世紀頃からロシアが北海道周辺に進出してきた。ロシアの圧力は強く、松前藩は余りにも非力であった。ロシアのラクスマンが、根室に來航したのは、寛政 4 年 (1792) である。(この時に、伊勢の国の船頭で極東ロシアに漂着し、はるばる露都にて、エカテリーナ女帝の謁見を賜った光太夫等を同行していた。：この間の事情は、井上靖氏の時代小説「おろしや国酔夢譚」に詳しい。)

ラクスマン以外にも多くのロシア船や露西亜人が現在の北方領土周辺を遊弋し、海獣業に従事していた。寛政 8 年 (1796) とその翌年には、英国船が虻田に停泊するなど北辺が騒がしくなった。かかる情勢に鑑み、蝦夷地調査が行われ、また林子平が「海国兵談」を著して、辺境の状況を説き、海防の策を講ずべしとの論を力説したが、同様の論は幾多の論者によって説に差異はあるが、為された。寛政 9 年 (1798) にも幕府は調査隊を東・西蝦夷地に派遣した。

幕府は、北辺調査の結果を受け、寛政 11 年 (1799)、東蝦夷地を松前藩から取り上げて幕府の直轄地とした。松前蝦夷地の警備は、従来は、松前藩の任務であったが、同藩は兵力も少なく、力も弱かったので、事ある毎に後詰を必要とし、その任には津軽藩が第一、第二が南部藩

であった。幕府直轄領となったので、津軽藩を佐原以東、南部藩は浦河以東に、勤番するように処置した。南部藩は、根室、国後、択捉に勤番所を設けて警備に当たった。文化元年には2藩に永久警衛に任ずべき旨を達した。蝦夷地の警衛は屯田を持ってすべしとの論議は既に以前からあり、実行動としての屯田は八王子千人同心の移住を持って嚆矢とする。その概要以下の通りである。

幕府は、武蔵野国八王子の同心から出された蝦夷地の開拓と警備に当たりたいとの申請を許可し、寛政12年(1800)、3月八王子を出発し、白糠と勇払に移住した。何れの地も交通の要衝であり、警備と開拓が二大任務であった。尚、八王子同心と言うのは、甲州街道の守備や東照宮の警備をする役人であるが、身分上は武士であるが、平生は高持ちの百姓として耕作に従事していた。蝦夷警備には同心の次・三男の内から選抜されたと言うから、或いは口減らしか。

両所に移住した者は、併せて130人であり、この内33人が蝦夷の土と化してしまった。自然環境条件の過酷さ、農業の不振による食糧不足等が原因である。文化4年(1804)には、同心を「函館地役雇」とし、警備の役割を重視した。この八王子同心の移住が日本の屯田の始まりであるとも言われる。

文化4年5月、函館奉行は、露寇の報に接するや、直ちに南部・津軽の両藩に命じて、警備兵力の増加を命じると共に、他藩にも出兵を命じた。津軽藩兵は、文化4年7月に宗谷に着到、そのうち100名は斜里に配置され、宗谷から陸路をオホーツク海に沿って南下7月29日に斜里に至った。漁場の小屋を仮陣屋とし、訓練の傍ら越冬の準備をすると言う状況であった。吹雪が吹き荒れ、通行は途絶し、流氷も押し寄せ、更には緑黄色野菜の不足による壊血病が蔓延り、12月ごろからは死亡者も現れ始め、その数次第に増加の一途を辿った。3月に入ってから、流石に病死する者は少なくなったが、全員罹病のため炊飯すら出来ない状況に陥った。為にアイヌを雇わざるを得なかった。6月に引き揚げ命令が届き、郷里に帰ることが出来たのは、僅か17名という悲惨な状況であった。この奇縁をもって斜里町と弘前市は姉妹都市を結んでいる。

斯様な時代背景があった為に、幕府としては、元禄以降新寺の建築を禁止していたが、ロシア人南下と共に切支丹が千島に広がりつつあり、邪宗門の禁制を掲げる為に必要であるばかりではなく、直轄以来官吏を始め南部・津軽の士卒その他の和人の為の葬礼、追福等に当たるべき僧侶がなければ不便とのことで、蝦夷地全体に5ヶ寺を設けるべく計画した。先ず3ヶ寺を設けるに決し、文化元年(1804)に有珠、様似、厚岸に寺院を建立して住職を任命した。これが知る人ぞ知る『蝦夷3官寺』である。過酷な条件下にあればあるほど、人は心の拠り所を求めるものだ。

さて、国泰寺である。蝦夷 3 官寺のひとつが何故、厚岸に建立されたのか。厚岸は、釧路管内でも古くから天然の良港として著名であり、道東の実質的な首都として栄えてきた。

国泰寺は、厚岸湾に突出するバラサン岬に抱かれるように建立されている。活動区域は、十勝、釧路、根室、国後、択捉という日高の襟裳岬から千島列島に及ぶ広大な地域である。建物は殆どが後代に改修等されているが、「葵の御紋」が刻された宝物が多数あり、初代住職以降歴代の住職が書き残した寺務日誌「日鑑記」等は貴重な文化財である。一方、見事な桜が 130 本あり、シーズンには賑わう。

蝦夷 3 官寺の設立以降の北辺の警備について概観する。

ロシアの蝦夷周辺域での更なる活動の活発化に伴い、幕府は、安政 6 年(1859)に、仙台藩、秋田藩、庄内藩、南部藩、津軽藩、会津藩の奥羽 6 大藩に「蝦夷地の開発守衛は、当時重要な事に付き、蝦夷地の内を分割し、領分として給与する。諸事熟議して、守衛開墾等特別に行き届くように取計るべし」と命じた。5 師団管内は、仙台藩と会津藩が夫々担任地域となった。仙台藩は、白老・十勝・厚岸より、根室西別境迄、国後・択捉を、会津藩は、根室西別より北海岸網走境まで、網走境から紋別境までを領地とした。仙台藩の陣屋は、厚岸・根室・泊、会津藩のそれは、斜里・紋別に置かれた。庄内藩を除いて、蝦夷地経営には見るべき成果がなかったとされている。

(参考：北海道史(昭和 12 年、北海道庁編纂・発行)、第 5 管区隊編「北海道郷土史」、各種HP)